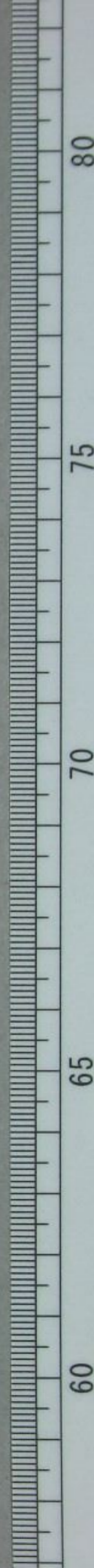




詩
三
行
坤

~ 5
1374
2



利
1374
乙巳



猿蓑集卷之五

鷹の羽を刷ぬカキツラフもつーと我

一ぬき月夜よめ集志カキ芭蕉

股引の朝アサめうウいイえエて 允兆

たぬきカキいイまマよヨすス 篠張カキのノら 史邦

まカキいイくクえエんンやヤちチ遠トうウ 海音カキ代ダイ月 蕉

人カキよヨらラれレすス 名物カキ乃ノ梨 来

去来



あつたふくし墨繪やうく様為く

邦

あつたふくし墨繪やうく様為く

兆

あつたふくし墨繪やうく様為く

来

あつたふくし墨繪やうく様為く

蕉

あつたふくし墨繪やうく様為く

兆

あつたふくし墨繪やうく様為く

邦

あつたふくし墨繪やうく様為く

蕉

あつたふくし墨繪やうく様為く

来

この春も雪盛りの男居たおれそ

邦

きよまつる月夜の静夜

兆

あつたふくし墨繪やうく様為く

蕉

あつたふくし墨繪やうく様為く

来

いらさむに二日乃物の喰て並

兆

あつたふくし墨繪やうく様為く

邦

あつたふくし墨繪やうく様為く

来

あつたふくし墨繪やうく様為く

蕉

瘦骨しほ此こすす起おこ燕つば子こ力ちからたたまま
 隣となりををううりりてて車くるま列りここむむ
 ううききくくをを積た敷し垣かきううりりととちちんん
 いいままやや別わかれれのの刀やいばとと一いつ出ですす
 世よののけけもも掃はらててううららををううららにに
 地ちををいい切きるるをを死しななししににままよよ
 青天あかはは有ありり月つきのの船ふねををけけ
 湖水うみのの秋あき乃すなはちち良よきき時ときとと我われ
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

柴しばののやや蕎そば麦あわぬぬすすままがが歎なげををよよ
 ぬぬののこころろ若わかききおお智ちぬぬ見みぬぬううららとと道みち
 押おし合あへへてて寝ねるるはは又また立たつつううりり思おもひひ
 ううらられれたたをを乃すなはちちままるるのの赤あかききをを
 一いつ掃はら歎なげつつくくるる念ねんののううらられれ
 枇杷たちのの右みぎををよよににああままのの境さかいのの
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

色蕉九
 元兆九
 史邦九

市中ハ物のよほら也及此月

女ハしつこい乃新

二番草取ハ果ハ種ハ去来

庚ハしつこいハ一枚

ハ筋ハ銀ハ見志ハ早自由

ハ長ハ指

九兆

色蕉

去来

兆

蕉

来

草村小蛙こはりのつゝとく
 露乃せきとらにけけゆす
 道心のむらりあはれつむむ時
 能やせせ尾の冬ハ位うを
 魚の思自志りある道の老延そ
 待人入く小出川の鑑
 立ちり屋風を倒す女子
 湯後ハ竹の筆子儼しと
 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

荷香けきと吹流す夕風
 停やともしくきりく
 さる川の橋を世をゆるけけ
 名 年ハ一年の地子くもや
 五六七よとよつけの家ミツタリ 儲
 足代よとよと黒川よる
 追よく早よ思了乃刀持
 心らるる何一水にほり
 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

戸邊のふもむらさきの賣屋敷
 せんせいのまうまわいつくさつく
 こらくとも草鞋を飾る月夜
 登るまうさしよ記——初秋
 らふまうさしよ記——初秋
 ゆうやくと蓋のありぬ草鞋
 草履は新目くたしたおやぢ
 このらむらさき 撰集れまうさ

来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

さよふくよふさつらつらつらつら
 波の果も皆小町ら
 あにあり粥すも海を
 ほんのぬまもさつらつらつらつら
 らふまうさしよ記——初秋
 らふまうさしよ記——初秋

来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

元兆 十二

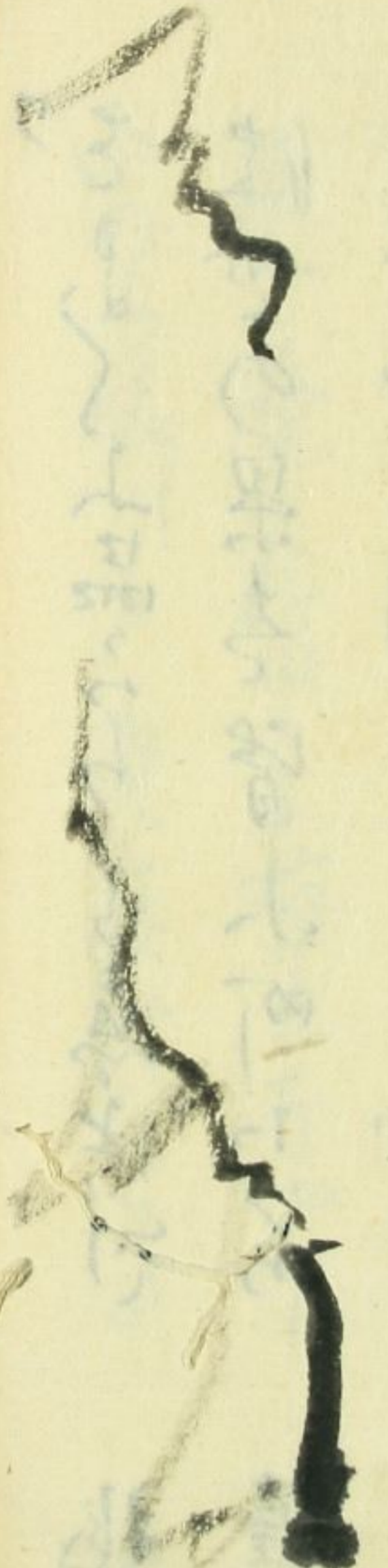
葉下

芭蕉

十二

去来

十二



灰汁桶の辛やまろりまろり

凡兆

あゆみかきりてや寝下る秋

芭蕉

新玉をぬかして月うけよ

野水

みへて驚く十月とろろ

去来

手代経へす物を梳く子向て

蕉

雪の音にたらしむる海

兆

華

二

葉出して松は餘る君りの物
 唐那うる根よそにれり
 巾よりにりもすこ喰へ風薫
 陸の白やふりやうしなと葉よ
 きのやういぐふにさして体じ
 運せしうき後うりのよ
 金鏝こくよふくすのやす
 女所月言すも代書くれ月
 葉 水 来 水 葉 水 葉

町内の秋の文は有や
 何をよんくもるさあらり
 花をちるすの西念り衣を
 よるれ酢蓋よ葉のこれつ
 名
 うるやう山陰傳よ四す
 柴ふは家のむをうり
 水に乃あはな海も北は
 旅の馳走に有明り
 葉 水 来 水 葉 水 葉

丁まはしむ女は智恵もくもく
何れもくもく。後乃ちたのく
夕月夜曇りの世ははたし
くもくもく。あそよめ水
うそつきに自慢いそくもく
又もくもく。此歌をよみ出す
塔より回の音やこいこい
かき後乃ち。くハ独ま社あり

来水 蕉兆 来水 蕉兆 来水 蕉兆

物うんは尻和さくもくもく
雨のやより。はさき中一迅速
昼寝より。き路の末はあき
まもくもく。水は雨はくもく
糸橋板い。いもくもく。はら
まもくもく。三月 曙乃ち

来水 蕉兆 来水 蕉兆 来水 蕉兆

九兆 九

芭蕉 九
 野水 九
 去来 九

饒乙初東武行 芭蕉

梅より葉まわりとけ者のさうけ
 かせあつりーとて君の猿乙初
 毛云雀あつ小田よ玉持はる也 珠碩
 志しき翁よてもよれよる矣 素男
 川隅よ虫齒うゑて居る月 刃初
 二階の窓よとれよるあさ 蕉

放やううつは跡はるるも
男

編の屋敷乃力たきこせ
碩

わうんは初まにけは終舞ふ
蕉

口花頭も昨はうは
刃

卯の割乃箕まに並ぬさぬ方
碩

すもきさるねのまらあちり
男

萩のれすまのれま
刃

花うらまの百舌るらう二
智月

懐よまをばあまじの輝の月
凡兆

ゆきまのぬあのはつら
刃

鏡の柄よまらりま
去来

灰まをさすかじあ跡
兆

喜れ目よはま跡てくる
正秀

店屋ゆきま跡のまらり
来

汗ぬくは踏のまらりの
半残

まられせりま
土芳

大膽よゆきしんくさくさく
 身いれぬ旅の取所なき
 小刀乃蛤又なる細工も
 棚よ火とすす大年の夜
 うらまゝのねの後の浪
 しり合せまゝの如きあ
 此なるのれぬとく破る解
 碧油録とせとく志し自記
 残 号 残 園風 猿 残 風 録

噴き隣の隣はらも縁つ
 深へいふよほとくうん顔
 歌たもと強をとおひる金は盡
 うすきかゝる舟の割下結
 花よ又いふよほとくうん
 雛の被をよほとくうん
 嵐蘭 史邦 野水 羽紅 風 号

芭蕉 三

乙卯	五	土芳	三
玆碩	三	園風	三
素男	三	猿錐	二
智月	一	嵐蘭	一
允兆	二	史邦	一
去来	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半残	四		

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうらまゝ山
 國分山と云ふは國分寺の名と
 傳ふたもへし蘇麻の細い流を流
 りて翠巖よ登る中三曲二百歩
 行へば八幡宮ありて神体
 ハ跡絶乃る像とや唯一の家

甚忌むる事とを两部光祿和の
利益益乃壘を同しうしたるは
又貴し日比お人の諸事あはれ
いし神とい物志つるある傍に位
捨一草の戸をよき根を軒
をさこそ屋のまら壘を以て狐狸
婦一とをほより幻位養と云あ
の僧はくハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあん坊りしを今ハ八年
しよは海にふよ幻住せ人の名を
のこ張せり予又市中歌さる事
十三年計ゆてみ十年下らさ
ふ無養虫のふのを先ん端中
家取離て奥羽歌沼の畧者とい
る一画といふことすまふいあは
るしき北海の荒儀よまら

破りてと歳湖水の波は漂鳥の
 浮巢の流とくくくくくくくくくく
 乃陰のうきく軒鴉炭あふ
 欠垣の流はあふくお月お
 初いこくくくく入くくくく出
 しくくくくくくくくくくくくくく
 のくくくくくくくくくくくくく
 山前きくくくくくくくくくくくくく

狂言くくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくく
 南くくくくくくくくくくくくくく
 しくくくくくくくくくくくくくく
 りくくくくくくくくくくくくくく
 北風海を渡しくくくくくくくく
 けくくくくくくくくくくくくく
 鳥橋くくくくくくくくくくくくく

本樵のあり舞麻のふ田の半笛と
 弁曇花よ夕雲のたもと水鶴は
 知音羨景地とくくめくはく事
 れく申よの三上山はと奉れ侍よ
 のくして武を抱ゆと古き抱り
 いとく田よ山よ古人をくく
 う山嶽千丈の帝袴腰こく山よ黒
 津の里いといく後く屋りく網代

一とくく人くく美集の溪あり
 きたた眺るくくあくく
 寄くく遠のほり松の棚作葉の因座
 とくく積の腰掛と名付彼海棠
 一とくく主の海客のくく
 結くく王公羽除衾、徒くく唯睡
 辟くく民とくく屏顔くく
 中くく空山よ風をくく

くーいーんあゝあゝのほろのほろのほろ
涙は自ら落ちてくるのちやあつと
一筋の歯のいゝいゝいゝ昔の昔の昔
何よんんんんんんんんんんんんんんん
る物よんんんんんんんんんんんんんん
の物よんんんんんんんんんんんんんん
つりさほよんんんんんんんんんんんん
かきげの甲斐なうんんんんんんんんん

洛よのほろいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

里の木のこた入まじりしのき乃福
らにみどり鬼の豆細くふあか
家ゆきぬ農談目既よ山の端よ
しききき夜屋舞よ月を待つてい
歌を付ら燈を取て園両よ是魂
をわきしすいこいこいこいぬよ
深寂をぬこし野よ跡をかく舞
とよあはれやこ病を人よ傳てせ

まにこいこい人よ似より借年月け
福う独り身は種をまのうよ
あはれは官愈命れ地をうい
やこいこい佛離祖室の扉よ入
ら舞いせうもあはれなすいんを
よあはれせらあ花鳥も情を芳しそ
暫く生涯のちち事とせいあれそ
流よす能き月ようてけ一筋よこ

了樂天ハ五臟ニ神をとり老拉ハ
瘦より賢愚文質のこころ
こころのこころのこころのこころ
かまひにけしめぬ

とむのしむはあのもるまき

題芭蕉翁國分山

幻住庵記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住庵
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清
第屋竹掃總數間
內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覽
今日因君尚益榮

元祿庚午仲殊日 震軒具拜

儿右日記

時を背中へんてやる林扉はれ 曲水
くわくくたの跡さつやまのこゝ 野水
鶏もくくくくくくくくくくく 去来
海へ五月雨うぬやうくくくく 凡兆
軒らうき名梨みくれ積のあ 千那
細脰たやまやまやまのやま 珍碩

贈紙帳

おもしろい旅地は... 野徑

... 里東

... 乙羽

顔や陣乃中... 怒誰

多... 探志

五羽六羽... 元志

木... 泥土

... 史邦

月... 正未乃

志... 柳陰

涼... 如行

訪... あり

椎... 朴水

目... 市隠

文... あり

接... 半残

麦乃粒をよき産す

一笠ふれや鳥お田のこと〜麦 之道

書音

一笠入ふし〜りや境のし〜
長崎 曾町

夕さや梅子の鼻れ〜し〜り 及肩

昇格後掛

梅ひや田と〜し〜り 尚白

贈篔

志〜の〜ち〜みの〜し〜
北枝

木履の〜侍ふ〜り藁杖ふ 木節

包紙の書

膳所

強よ〜す〜袋や〜露 扇

稻のふ〜れを〜佛杖立立付か 智月

石とや〜て果下〜輝の〜 羽紅

桶の輪や〜て〜むを〜し〜り 昌房

里ハ〜し〜り〜し〜り〜り〜り 何処

啼やい〜路は〜の〜越人

越人とい〜訪合て

筆の〜供よ〜入卷の〜等哉

明年弥生尋旧卷

来ぬやよ〜嵐蘭

同其

涼〜衣〜居を〜住持〜曾良

跋

猿蓑者色蕉翁滑藝之首韻也

非比今ニ彼山寺偷ニ衣朝市頂冠笑

只任スレ心感物ニ写興ヲ而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊ス学ス棋館

竹窓躡ヲ等凌節ヲ斯有歲屬撰テ此

集玩弄無レ已自謂絶ラ超狐豚白

裘者也於是四方嗟友ト憧々往

來或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維貳元祿四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一藁高張有補干詞
海渙人云

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

京寺町二條上ル

井月屋庄無衛極

蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四
蘇州府志卷之四

神野氏

